翻訳

「孤独な男」

―ルイージ・ピランデッロ『一年間の物語』より（七）―

尾河直哉

孤独な男[1]

季節が良くなったので、ヴェーネト通りのカフェの、屋外の木陰になった屋外の小テーブルを囲んで集まるようになった。

最初にやってきたのはグローア父子だった。父子はあまりに孤独で、こうして近くにいながらも、お互い遙か彼方に離れているように見えた。腰を掛けるとすぐに、魂でも抜けたようにじっと黙り込み、そのため、周囲からさえ遠く引き離されているようで、もし目の前になにかが落ちてきても、まぶたをしばらくしばたかせたあとでなければ目を凝らすことができないほどだった。最後に二人、フィリッポ・ロメッリとカルロ・スピーナがやってきた。ロメッリは五ヶ月前妻に先立たれ、スピーナは独身である。マリアーノ・グローアは一年ほど前から妻と別居しており、ひとり息子と暮らしていた。もう高校生になった息子の名はトレッリーノ。痩せて鼻が高く、落ちくぼんだ鉛色の小さな目は少しやぶにらみだ。

小テーブルでは挨拶が交わされたあと、言葉が交わされることはほとんどなかった。ピルゼンビールの小グラスをちびちびやったりシロップをストローで啜ったりしながら、ひとりまたひとりと行き交う女たちを眺めている。単身で、カップルで、あるいは夫と連れ立って行き交う女たち。そこには既婚、未婚、子ども連れの若い母親がいれば、ヴィラ・ボルゲーゼ行きの市電から降りる女、そこから馬車で戻ってくる女、正面の大きなホテルに徒歩で、あるいは自動車で出入りする外国人の女がいた。

飽きもせず、あちらの女たちにじっと目を据えていたかと思うと、今度はこちらの女に視線を切り換える。女を目で追い、その動きを吟味したり特徴を探り出したりしながら、胸を、喉元を、レースの袖から透けて見える薔薇色の腕をじっと見つめた。四人はこうして群れ集う生命のざわめきと百花繚乱の姿や色や表情に陶然とし、馬車の轟音と近くのお屋敷からしじゅう幕なし聞こえてくる雀の囀りのさなかで、女を盗み見たり、あちこちから慇懃な微笑を引き出しているうちに、感覚と思考と後悔と欲望が綯い交ぜになった切なくやるせない気持ちで胸が苦しくなった。

四人の男は、それぞれの仕方で、女と、女だけが人生ににおいて与えてくれる利益にたいして、ひりひりするような欲求を感じていた。この女たちの多くが、愛情と真心をもって傍にいるだけですでにそうした利益を男たちに与えているというのに、恩知らずの男たちときたら、その恩義に応えようともしない。

だれか悲しそうな女を目にして、こうした疑念が兆してこようものなら、四人の眼差しにはたちまち、深い悲しみや激しい非難や慈悲が入り混じった賛美の色が滲み出す。あの若い娘さんたちは？　はたして肉体の喜びを捧げるつもりがあるんだろうか！　心の中ではおそらく苛立ちながらも外づらだけはおずおずとしたふりを装いながら男を待つうち、色香があせてゆくにちがいない。

この魅力的な画を前にして、女がいないために物音ひとつしないがらんとした自分たちの寂び住まいを思い出し、暗澹たる気分に気圧されて、四人はそれぞれため息をついた。

亡き妻に可愛がられていた小柄で清潔な快男子フィリッポ・ロメッリは、日曜ともなると、皺ひとつないぱりっとした黒の喪服を着て故人の墓に花を手向けに行っていたが、この男は、他のふたりにも増して、思い出のつまった我が家が嫌でたまらなかった。家のなかのあらゆるものが、決して帰ることのない存在を陰でひっそり待ち受けているように思えたからである。その存在とは、夫をいつも明るく迎え入れ、癒し、愛撫し、あなたの妻であることにどんなに満足しているか、繰り返し繰り返し嬉しそうな目で語ってくれた妻だった。

フィリッポは、目の前を歩いて通り過ぎてゆくすべての女たちに、妻のことを生き生きと思い出させてくれる優美な動きがどこかないものか目を凝らしていた。晩年のころの動きではなく、今眼前の女が刺激的に蘇生させてくれる、記憶のなかの、あの歓びを与えてくれたときの動きである。そして、のどを苦しくせり上がってくる衝動的な興奮に思わず唇を噛み、枝に置き去りにされ風にさらされた鳥たちのように半ば目を閉じた。

晩年の妻であっても、今や帰らぬ歓びの記憶は愛おしかった。もう俺のためにあの歓びはありえない。これから俺を愛してくれる女などいないだろう。五十にもなるような男を。

ああ、この男にとって、運命はなんと過酷だったことか！　老境にさしかかり、妻の愛がひとしお必要となったそのやさきに、

若かりしときにはいつも腰の据わらなかった愛さえも貞節な巣の平安を大切にし始めたまさにそのときに、伴侶を奪われてしまったのだ！　そして、季節外れの、滑稽で絶望的な愛の不安を味わわなくてはならない身になってしまったのである。

フィリッポが、何年も前から刎頸の交わりを結んできたスピーナにこう言ったのは一度や二度ではなかった。

「パンと家と愛の三つがなけりゃ男は心穏やかに生きていけない。こりゃもう火を見るより明らかだよ、あんた。女ならあんたにだっているかもしれない。今のところ、おれよりもはるかにいいご身分だと認めてやってもいい。でもなあんた、若いときは短いぞ。年取ってからのがはるかに長いんだ。チョンガーも若いときゃ楽しいが、年取りゃつらい。ところが女房がいりゃ逆だ。つまり、女房持ちは楽しいときが長いってわけよ！」

たしかにそのとおりかもしれない。だが運命とは皮肉なものだ！　独り身のまま歳を取り始めたスピーナは、たしかに、借りた部屋で、これまた自分のものではない俗悪な家具に囲まれて送る虚ろな人生がつらくなり始めていた。しかし、若いときにはそれなりに楽しんだわけだし、女性の心遣いや日頃の愛情を受けずにこうして孤独に生きることを望んだのだ。ところがフィリッポときたら！

だが、もっと残酷なのはマリアーノ・グローアの運命だろう。情けない姿を見るだけでそれは十分にうなずける。

ロメッリのばあい、たとえこうして失意の底にあっても、小ぎれいにして、ごま塩髭さえきれいに刈り込む気力を失っていなかった。ところがグローアときたら…太鼓腹のだらしない服装。メガネをかけたマスティフ犬といった面構え。いったい何日剃っていないかわからない髭。ボタンの取れたジャケット。しわくちゃの襟は汗で黄ばみ、ネクタイはよごれて曲がっている。

女を見つめる眼差しは凶暴で、貪り喰いそうなありさまだ。

そしてときおり女性をじっと見つめ、まるで鼻でもつままれたように息を切らしていた。椅子をきしませて躯を動かし別の姿勢をとるが、その姿勢もまた獰猛で、ステッキの握りに沈んだ顎の肉が汗でぎらついている。

妻――鼻梁が通り、両頬に小生意気なえくぼを湛え、目が生き生きとした小柄で魅力的な女性――が浮気をしていることは何年も前から知っていた。ついにある日、妻の不貞を認めなければならなくなり、法的に別れることになった。グローアはすぐに後悔したが、女の方は、二日おきに訪ねてくる息子を通して手渡される月二百リラに満足して、それ以上の接触を持とうとしない。

哀れな男は、妻をふたたび抱きたいという欲望にじりじり焼かれていた。まだ気が狂ったように妻を愛していて、妻がいなければいてもたってもいられない。男の胸中にもはや平安はなかった。

枕に顔を埋めて泣いたり呻いたりしている父親の声を聞きつけ、

横で寝ている息子が立て肘で半身を起こし、「パパ、パパ…」と優しい声で慰めてくれることがよくあった。

しかし、そんな息子のトレッリーノにしても、こうしていらだつ父親の姿にうんざりすることもしばしばだった。しかも、母親のところに行かねばならない日になると、彼女に憐れんでもらうために、伝えてもらいたい泣き言をあれやこれやとほのめかし始める。やれ、この歳になってだれも面倒を見てくれる者がいない、真っ暗な気持ちで涙に暮れているだの、やれ、眠れない、堪えられない、どうしたらいいかわからないなどと言い出すのだ。そうなると息子はきまってため息をもらすのだった。

トレッリーノにとってそれはどれほどの苦痛だったことか！しかも恥ずかしさのあまり、狼狽の果てに冷や汗さえ滲む。こうして両親のあいだをいくら行ったり来たりしても、まったく埒があかないだけによけいだった。というのも、母親は頑として、父親の繰り言なんかにいっさい耳を貸すつもりはない、とすでに再三再四息子に伝言させていたからである。

そして母親との面会から帰ってきたときがまた新たな苦痛の種だった！　父親は息を弾ませ、顔を紅潮させ、苦しそうに突き刺すような眼を涙で光らせながら玄関先の階段の下で待っていて、息子のすがたを見かけるやいなや矢継ぎ早に「どうだった？　母さんどうしてた？　何て言ってた？　どんなようすだった？」と訊くのだ。

そして息子が答えるたびにまるで痛撃を喰らったように顔をしかめ、目を閉じて、口を大きく開く。

「ああ、そうか、黙ってたか。なにも言わなかったか。ああ、うまく行ってるって？　で、なんて言ったんだ、おまえは」

「いや、パパ、ぼくはなにも…」

ああ、ほんとうになにも言わなかったのだろうか？　怒りのあまり自分の手を噛む。すると言葉が怒濤のように溢れ出てきた。

「ああわかった、わかったよ！　おまえたち好きにやってろって！　そっちのがいいんだろ…そうしてなって。ぜひともな…おまえたち二人は痛くも痒くもないから。こちとら牛だ。おまえたちのために汗水たらして働く牛だよ…そのまま好きにやってろって。おれのことなんか気にしないでいいよ！　でも分かるか、ちくしょう。いまのままじゃ生きてけねえんだよ、おれは。助けが必要なんだよ。これじゃあ死んじまうんだ。わからないか？　これがわからないか？」

「でもパパ、ぼくにいったいなにができるっていうの？」トレッリーノがついに堪忍袋の緒を切って噛みついた。

「なんにもせんでいい！　そのまんまにしててくれ！」涙を呑み込んで話し続けた。「けどな、このままでおれを死なせるなんざ酷いとは思わんか？　だって、おれはもうすぐ死ぬんだから！　おまえらふたりを路頭に抛り出しておれは死ぬ！　この世におさらばしてやる！」

しかしこうして感情を爆発させてしまったことをすぐに悔いて、父親は愛撫したり、贈り物を与えたりして息子に埋め合わせをしようとする。甘やかし、母親のような気配りを惜しみなく与え、息子が頭の先から爪の先まで良い服を着て、ファッションモデルのような恰好で一日おきに母親に会いに行けるのなら、自分のことは、服も、靴も、下着類も気にならなかった。

だれからも報いられず、だれにも同情されず、それどころか、みんなから踏みにじられているこの善意に、父親は自分自身でほろりときていた。いや、自らの感情でぐにゃぐにゃになっていた。不安で締め付けられ、苦しみに浸かったまま心がまさに頽れてしまったように感じていたのである。

こちとらいささかたりとも悪いことをした覚えがないのに、あの薄情女め、おれをこんなに苦しめやがって！

優しく醇朴な、子どものような心臓のまわりに、豚のように肥大したこの肉体をいったいどうできよう？　家庭的な男に生まれ、生涯にたったひとりの女しか愛せないようにできているというのに！　女が少しでも――たくさんとは言わない！　たくさんとは！――愛してくれるなら、この少しの好意にどれほど報いることができるだろう！

こぼれないように涙を溜めたガラスのような眼で、こうして、通り過ぎてゆく夫婦をひと組みひと組みじっと見つめていたが、どの夫婦も愛しあい睦み合っているように思えた。夫をやさしく愛し、子どもたちの面倒をよく見る、家庭の微笑みであり祝福であるような誠実で賢明な妻であれば、どの妻であっても、その足下に身を投げ出したい気持ちだった。

そんな女こそ、おれの、このおれのものになるべきなのに！　こうして通り過ぎてゆく女たちのなかは、善良な女がどれほどいることか。おれを幸せにしてくれたかもしれない女がどれほどいることか。だって、おれの注文はささやかで、愛情が少しだけあればいいんだから。ほんの少しだけ！

グローアは、目の前を通り過ぎてゆく女たちひとりひとりに獰猛ともみえるあの眼差を投げかけてその愛情を哀願していたが、しかし、それを期待していたのは女性全員からではなく、たったひとりの女からだった。婚姻関係で結ばれ、横にいるかわいそうな息子の母親であるその女だけが、誠実な愛情を与えてくれることができたはずだからである。

その夕、通りにそって並んだ大木の陰では、生命が蠢き、いつもより激しく震えていた。

友人同士のスピーナとロメッリはまだやってきていなかった。近くの屋敷から流れ出すあらゆる芳香で満たされた大気は、さながら金色の光に沸き立っているようだった。大きな帽子の下でつんと澄ました女たちの顔が真っ赤な照り返しを受けて微笑んでいた。その微笑みと同時に、胸元や背が大きくはだけた服によっ

て強調された肉体を、男たちの称賛と欲望へと捧げているのだ。
グローアのすぐ背後には花屋があったが、その薔薇の放つ香りがあまりに官能的なため、この哀れな男は深く酔ったように頭がくらくらし、眼前に蠢動する生命の輪郭がぼやけてきた。遠のいて聞こえるざわめきが、眼前の不思議な夢からではなく、はるかかなたから聞こえてくるように思えて、目にしているのがはたして現実だろうかと訝しくなる。
やっと例のふたりがやってきた。なにやら熱心に話し込んでいる。黒服を着込んだ小柄なロメッリは落ち着きのない発作的な動きでときおり電気でも通ったように突然飛び上がるので、びっくりしたスピーナがロメッリの興奮を抑え、説き伏せるのだった。
「わかった、わかった、あの姉妹だろ。おれに任せてくれ！まだ早すぎるんだよ。ま、座ろう」
グローアは、そんな話を息子の前でするなと目配せで伝えたが、興奮しすぎたふたりに自制するつもりがないことを見て取り、トレッリーノ方に向くと、ヴィラ・ボルゲーゼの方にちょっと散歩でもしてきたらどうだと言った。
息子はため息をつきながら不承不承立ち上がった。何歩か行ってから振り向くと、三人が小さなテーブルの上に頭を寄せ合ってひそひそと内緒話に興じていたが、父親はしきりに頭を横にふって、だめだ、だめだと言っていた。
半時間経ってトレッリーノが戻ってくると、ロメッリとスピーナはすでにどこかに出かけたあとで、父親が独りで息子を待っていた。孤独に打ちひしがれ、眼に宿った精神的な苦しみで表情があまりにも変わっていたため、息子はびっくりして父親から目が離せなかった。
「もう行こうか？　パパ」
グローアには聞こえていないようだった。息子をじっと見つめると、子どものように唇を噛み顔を歪ませて涙を堪えたが、やがて全身を震わせて噎び泣いた。
そして立ち上がると、息子の腕をつかんで力いっぱい握りしめた。口にできないこと、どう口にしてよいかわからないことを伝えようとするような握り方だ。それからふたりはポルタ・ピンチャーナ通りの方へずんずん歩いていった。
トレッリーノは、母親の住む家の方へ引きずられているような気がした。やっぱりそうだ。もうすぐ着く。二番目の路地を曲がってすぐ、街灯が点いているところだ。そして徐々に父親の腕に抗うと、抵抗に気づいた父親が、懐柔するように不安げに息子を覗き込んだ。
「ああ、まいったなあ」とトレッリーノは思った。「いつものパターン、いつもの拷問だ！　まじで行くのかよ。お願いだから聞き入れてと母さんにさんざん頼み込んで、もう一度ダメだと言われるのがオチだろ？　だめだ、だめだ」

そして路地に入る前の街灯の下で踏ん張って止まると、父親に言った。

「ねえ、パパ、いいかい？　ぼくは中に入らないよ！　ぼくは行かないからね！」

グローアは恐ろしい目で息子を見た。

「行かないだって？」身体が震えている。「行かないだって？」

そして、それ以上なにも言わず、静かに息子を突き放した。人気ない道のまんなかにぽつんと取り残されたトレッリーノは、最初しばらく茫然としていたが、こうして突然飛び出して遠くまで行ってしまった父親が、自分の許から永遠に離れていってしまうのではないか、この道をゆく数多くの縁なき衆生に紛れてこのまま戻らなくなるのではないか、そんな思いにふと囚われた。そこで、萎えた気持ちを抱えたまま、遠くから父親の後を追うことにした。

カーポ・レ・カーゼ、ドゥエ・マチェッリ通り、コンドッティ通り、フォンタネッラ・ディ・ボルゲーゼ通り、ニコスィア広場…相手に感づかれないよう後を追ってゆく。と、トルディノーナ通りに出たところで父親は足を止めた。

薄暗い小さな路地からロメッリとスピーナが出てくるところだった。父親がそのふたりに合流する。ロメッリは黒い縁取りのあるハンカチを目に当て、すすり泣いていた。三人ともテーヴェレ川沿いの手すりに身を持たせようとしている。

「馬鹿野郎！　なんでだ？」スピーナがロメッリの腕をつかんでゆすりながら叫んでいる。「あんなにかわいらしくて、あんなにやさしいのに！」

「だめなんだ、どうしても！　あんたになんか分かりっこないよ…羞恥心なんだ！　家庭の神聖さなんだよ！　問題は」

それからスピーナは父親の方を向いた。

五月の明るい晩、すでに消えた昼間の光をまだ留めているような川面の近くでは、取り乱したその三人の身振りどころか、顔の表情まではっきりと捉えることができた。

スピーナはロメッリが間違っていることを今度はトレッリーノの父親に説得しようとしていた。そのロメッリはふたりから離れて相変わらず涙を拭いている。父親は大きく見開かれた恐ろしい目でスピーナを見つめ続けていたが、出し抜けにスピーナのジャケットの襟をつかむと、大きく揺さぶってスピーナを遠くに投げ飛ばした。次いで、川沿いの手すりに跳び乗ると、持ち上げた腕を大きく開いて叫んだ。

「いいか、こうするんだ！」

そして川に飛び込んだ。大きな水の音。叫び声がふたつ。そして遠くからはみっつめの、より鋭い叫び声が聞こえた。恐怖に足が竦んで走ることもできない息子の叫び声だった。

（この項、完）

(1) 初出は一九一三年七月二二日付『コッリエーレ・デッラ・デーラ』紙。

底本には*L'uomo solo* in Luigi Pirandello, *Novelle per un anno*, a cura di Mario Costanzo, Introduzione di Giovanni Macchia, volume primo, tomo I, Arnoldo Mondadori; Editore S.p.A., V edizione I Meridiani febbraio 1996を使用した。